

第1章
少林寺拳法の歴史



少林寺拳法草創期の
修練風景 (1950年代)

少林寺拳法には、開祖宗道臣が種々の体験から得た教訓が練り込まれている。その中で「技法」に焦点を当てて見た場合、大きな影響を与えたものは、戦時中、宗道臣が中国で学んだ武術にあり、そこで出会った2人の師父から中国武術の手ほどきや精神的な影響を受けた。この偶然の出会いにより、少林寺拳法の技法の源が生まれたのである。

ここでは少林寺拳法の歴史を、その原点から紐解いていくこととする。

第1節 少林寺拳法開祖 宗道臣

◆ 宗道臣誕生

宗道臣は、1911（明治44）年、岡山県英田郡江見村（現美作市）で生まれた。8歳の時



少年時代の宗道臣（後列右）と母、妹2人

に父親を亡くし、母、妹2人で生きていたが、その3人の肉親も相次いで亡くし、また中国東北部（後の満州）にいた父方の祖父までも亡くなり、弱冠16歳で天涯孤独となったのであった。母、妹2人の死は、後の宗道臣の思想に大きな影響を及ぼした。

生前病気がちであった母は、救いを求めてある新興宗教に傾倒していった。「前世での因縁」だとか「信仰が足りない」とか、さまざまな理由をつけられて精神的不安を煽られ、そのうち教団施設で暮らすようになり、宗道臣と妹2人は母の実家や親戚の家にそれぞれ預けられることになった。

母親は盲腸炎を患ったが、適切な治療や手術はせずに、自身が信仰する神様の助けを祈るば

かりであったため、症状が悪化し手遅れとなり亡くなってしまう。この体験から、現実の苦難から人を救ってこそ、本当の宗教であろうという反発が宗道臣の心の中に生まれ、後に信仰の在り方を考える原点となっている。

またある夜、病床にあった下の妹から、宗道臣は「お饅頭まんじゅうが食べたい」とねだられた。饅頭は当時なかなか手に入らない食べ物で、食うや食わずの生活で兄妹は一度も口にしたことがなかった。宗道臣は、夜遅かったが街中を駆け回り、ようやく見つけた一軒の菓子屋に頼み込み、事情を説明して何とか饅頭を手に入れることができた。持ち帰って妹に食べさせようとしたが、妹にはもはや口にする力さえ残っていなかった。

このことは、誰かを、何かを、何とかしたいと思つたところで、自分にそれを実現するだけの力がなければ、何もすることができない。人の役に立とうとする者には力がなくてはならない、という信念を宗道臣に抱かせることになった。



宗道臣の生家（現・岡山県美作市）

◆ 中国大陸へ

宗道臣が初めて中国大陸に渡ったのは1925（大正14）年、14歳の時である。

当時、日本は10年の朝鮮併合に続き、中国東北部に進出を始めるなど国家の利益を優先し、軍事力による外国への侵略を是認する動きが活発になりつつあった。一方では、23年に発生した関東大震災や、1930年代の経済恐慌などにより、人々の閉塞感と不安は強く、そして大きくなるばかりであった。

そのような情勢の中、当時の日本人、とりわけ若者には、中国大陸での資源開発や新しい生活へのロマンを夢見る者が多く生まれ、中国に対する憧れが広まっていた。民衆の不安感と中国進出に対する期待感が醸成され、政治・軍事においてファシズムを形成するなど、社会全体に不穏な雰囲気漂っていた。

14歳の宗道臣も、そのエネルギーの向かう先を中国大陸に求めたのは自然だったと思われる。宗道臣の父方の祖父が南満州鉄道（満鉄）の嘱託職員として中国東北部に住んでおり、妹たちを守るための「口減らし」の意識と中国大陸への憧れから祖父を尋ねて渡航したのである。

祖父は剣術・槍術・柔術に精通したひとかどの武道家でもあり、滞在中、祖父から一通りの

武道の手ほどきをうけた。その時の祖父の指導ぶりは「親の仇かたきと思つてかかつてこい」というほど厳しいものであった。

しかし一方では中学校にも通わせてくれ、食事にも困らない幸せな生活を送っていたと、後年の宗道臣は回顧している。また祖父は満鉄に勤務するかたわら、中国の情報収集を行うなど中国工作の一角を担う立場にもあり、そのため、祖父のもとには、さまざまな人物が出入りしており、それらの人々との出会いは、宗道臣に強い影響を及ぼした。

◆ 2 度目の中国渡航

しかし間もなく、母親の危篤により日本へ帰国することになった。帰国後間もなく、母親が亡くなり、その後1年の間に2人の妹も立て続けに亡くなり、ほどなく祖父もこの世を去り、宗道臣は16歳で天涯孤独となったのである。

宗道臣は、もはや失うものも怖いものもないという思いも手伝つて、自身の若さとエネルギーの向かう先を再び中国大陸へ求めていった。また縁あつて、右翼的な思想を持つ人々との繋つながりを得、彼らの国家主義的な話に耳を傾けるうちに、自分自身がじつとしていられないよう

な気持ちに染まっていくことになる。そして「日本民族発展のための捨て石になろう」という思いから、对中国の特殊工作任務に関わることを志願し、17歳になる直前に再び中国東北部に渡ったのである。

当時、中国東北部は日本の関東軍が権力を固めつつあり、中国系の軍閥と度重なる衝突を起こしており、1928（昭和3）年の張作霖爆殺事件以後、中国東北部を中国本土から切り離して独立政府、いわゆる満州国を樹立させようという動きが活発化していた。

政治状況が不安定な中、对中国の工作任務に関わることになった宗道臣は、任務の必要性から現地において、ある老師に弟子入りをするようになった。身分を隠すためである。

◆ 陳良老師との出会い

宗道臣に初めて中国武術を手ほどきした人物こそが「陳良老師」であり、宗道臣が後に少林寺拳法創始に至る影響を受けた人物の一人であった。

陳良老師は、現地秘密結社の重鎮として日本特殊工作に関わる人物であったと同時に、嵩山すうざん少林寺に源を発する「北少林白蓮拳」の師父でもあった。宗道臣は当時を振り返り、「ある老師

に弟子入りした」と回顧しているが、恐らく、陳良老師もまた身分を隠して潜伏活動をしていたのではないかと思われる。陳良老師は、日本語がかなり上手であり、もと清朝の軍人で、日本でもしばらく学んだことがあるということであった。中国人でありながら日本軍と協力関係にあったのは、自ら所属する結社の利害と日本軍の利害が一致したからと考えられる。

この陳良老師との出会いを衝撃的にした一つのエピソードがある。

ある時、工作に関わる者同士の雑談の中で、そのうちの一人が宗道臣に対して、「君は腕自慢で、なかなか力も強いようだが、陳さん（陳良老師）の手を、机から引き離すことができるかね」と問うた。宗道臣は、半信半疑ながら恐る恐る老師の手首を掴んで引つ張ったがびくともしない。再び力を入れたが同じことであった。ついには立ち上がって腕を捻ろうとしたところ、逆に宙に投げ飛ばされてしまった。すぐに起き上がろうとしたが、手首と肩に激痛が走り身動きが取れない。陳良老師に片手で押さえこまれたのである。

見たこともないその技に衝撃を受け、瞬時にしてその武術の虜とりことなった。宗道臣はもともと武術が好きだったこともあり、陳良老師と起居を共にするようになり、少しずつ武術の手ほどきを受けていった。しかし、この時教わった技は、体系化されたものでもなく、覚えるのに大変苦労したと回想している。

この間、陳良老師からさまざまな技術を学んでいくにあたり、いつしか任務を超えた強い師弟関係が生まれたのではないだろうか。2人が任務で中国東北部の各地に赴く際、その先々で秘密結社の頭目や師父の紹介を受け、その人たちが身につけていた拳技を教わっている。互いの絆きずながあつたからこそ、任務以外の貴重な機会を得られたのである。

◆ 失意の帰国

しかし工作任務は過酷を極め、体調を崩すことも多くなり、最後はチフスかかに罹り、19歳の時日本に帰国することとなった。

帰国後、飛行隊を志願して日本軍に入隊したが、そこで待ち受けていたのは、人間の尊厳を無視した厳格で無機的な縦割り社会であつた。宗道臣は、当時の日本人からすると体が大きく、色白であつたため、よく生意気だなどと理不尽な理由で一方的な暴力を振るわれたと回想している。後に少林寺拳法の組織づくりをするにあたり、こうした当時の軍隊に象徴されるような無機的な縦割り社会、意思の力を拒否する組織体への強烈な反骨が大きな核を占め、生涯にわたり愛情や信頼拔きの縦割り社会を嫌い続けた。

暴力に耐え忍び、訓練を続けていたが、ある時体調を崩して入院した際に、医師から心臓弁膜症の診断とともに余命1年の宣告を受けた。そして軍務に就くことが不可能とみなされ除隊させられたのであった。

除隊後は、金も行くところもなく失意のどん底にあった。あれこれと自分の行く末を思案したであろうが、「あと1年生きられるなら、死ぬまでにやりたいことをやろう」と考え、三度^{みたび}、中国大陸に渡るのであった。この頃、日本軍は中国東北部に満州国を成立させようと陰謀工作をし、1931（昭和6）年に満州事変を起こしている。宗道臣は満州事変直後に中国に渡り、再び中国東北部で工作任務に就くことになり、現地において陳良老師とも再会することになった。

医師から受けた余命宣告が胸に刺さり自暴自棄になっていた宗道臣は、まるで死に急ぐように危険な仕事に従事するようになっていった。そんな様子を見ていた陳良老師が「おまえが1年以内に死ぬと誰が決めた。天命は人間の計り知ることのできぬ妙理である。生きている間は死にはせぬ」と言ったことが、以後宗道臣の死生観の基となった。